
酒屋の彼女は異世界人

羽ポポ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

酒屋の彼女は異世界人

【Nコード】

N3072Z

【作者名】

羽ポポ

【あらすじ】

24歳独身の流田恵理香は酒屋の一人娘（同名・名字無し）に憑依してしまう。

憑依先の世界は、商人ギルドあり、傭兵ギルドあり、職人ギルドありと、とりあえず産業革命以前のヨーロッパ的な感覚だった。

ナンじゃこりゃー！！とはならず、持ち前の馬鹿ツポサであつさり順応する彼女。

遺伝らしき両親の馬鹿さ加減により、バレルことなく一ヶ月が過ぎた……。

第零話：酒は飲んでも呑ま……

神に意思はあるのか。神に個体はあるのか。力は、知性は、欲は、善悪はあるのか。

そもそも、我々が言う『神』とは、何を以て『神』足り得ているのか。

学生の頃、恵理香は良くそんな事を考えて時間を潰したものだ。神学や哲学に興味があった訳ではないけれど、大学のサークル活動でも似たような物に入っていたし、今思えば答えの出ない事を考えること自体が好きだったのかもしれない。

まあ、そんな無駄な事を考えても生活できていた学生時代はとうの昔に過ぎ去ってしまった。

彼女はもう社会的責任を負わなければならない人間、つまり社会人だ。行動一つ一つに責任を要求され、応えられなければ相応の報いを受ける存在。

そう、だからつまりは今の彼女のこの状態も、要するに自業自得なのである。

「オエエエエエ！」

トイレの中。金色のモザイクをかけられた液体を唞内からぶちまけながら、恵理香はげっそりした顔で口元を拭っていた。

「うっ、キモチ悪い……。流石に昨日のあれは飲み過ぎだったかな。いや、でもアソコは飲むしかなかったでしょ、飲む所だったでしょ」

トイレの便座に肘をつきながら、恵理香はため息まじりに昨夜の事を思い返す。

『やったつ。明日休みじゃん！ これはもう飲むしかないわね！ つて、ゲツ！ アルコール切れてる。仕方ない、買いに行くしかないかー』

ここまででは普通だった。良くありがちな社会人の休日前夜の過ごし方だと自負できるほど。

しかし、歯車は買いに行った店先で狂いはじめたのだ。

『えーと、ドライドライ……、あれ？ 一箱24缶入りが千円？ な、な、何ですとー！？』

これは買わなきゃ！ 人間として買わなきゃ駄目だよね！ とか何とか言いながら二つばかり箱を担いで、ルンルン気分で精算した。ああ、そうだと。そのまま妙に高いテンションを保ち、夜の爆笑番組をサカナにアルコールを浴びるように呑んだのだ。

そんで今、これである。

「オエエエエー！」

恵理香は黄金色の流動物をぶちまける。それから、独特な臭いを出すその吐物を見つめ……

「うっプ、まずい。自分のゲロで貰いゲロしそう。あーあー、削除削除ー」

……気分が悪くなった。馬鹿な奴である。彼女は慌ててレバーを捻り、変な色の流動物を水で洗い流す。

勢い良く回転する水が、黄金色のそれを奥へと引きずり込むようにして流れる。

『出すもんは出した、すっきりしたぜ、ふーっ』と、恵理香が安堵した、その時だった。不意に、唐突に、それこそ何の前兆もなく、世界がぐらりと傾いた。

「……はれ？」

咄嗟の対応など取れるはずもなく、恵理香は背後の壁に倒れ込んだ。反動で後頭部をしたたかに打ち付けてしまい、余りの衝撃に悶絶する。

そして、その痛みの中、恵理香は見てしまった。

「え、ちよつ。待つて待つて、それはないそれはないよ無いつたらダメだつたらいやいやいや無理無理ムリッ」

傾いた世界。もしかしたら、彼女の家だけが急な地盤沈下に襲われて斜めになったとか、そんな話だったのかもしれないが、今の恵理香にとってそんなのはどうだって良い事だった。

傾いた世界。重力が突如として向きを変えたように、背後にあつたはずの壁に身体が押し付けられている。

そんな彼女の前には洋式便座がワンセット。中にはまだ流れきつていなかった自身の 瀉物が……。

まあ、つまり、そういう事なのであった。

「イヤイヤイヤッ。自分のゲロ被るなんて、死んでもイヤ、あ、あ、あ、イヤアアアア……ッ」

断末魔もかくや、と言わんばかりの彼女の絶叫は、晴れ渡った五月の空に吸い込まれるようにして消えていった。

酒屋の彼女は異世界人

『第零話：酒は飲んでも呑まれるな？ 飲んだくれが言う台詞じゃないよそれ』

正式名称【アズアマナク】通称【青の王国】は、水に恵まれた肥沃な土地を持つとしてその名を知られている。

国土の中心に位置する王都の側を横断するように走る巨大な河を生活の中軸に置き、人々は平和な生活を享受していた。水路としても利用されるこの河の名はヒースという。

その河の上流、王都から北北西に進んだ所に位置する小さな町。

ディラック、ここに根を下ろした初代の長の名を冠するその小さな町の、とある家の中で、物語は始まるうとしていた。

「う、うう。……イヤ、イヤッ。ゲロはイヤ、ゲロはイヤ……」

そんな訳の分からない寝言とともに……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3072z/>

酒屋の彼女は異世界人

2011年12月10日20時46分発行